

ハマーショルドのコンゴ政策 —国連平和活動に見られるパターナリズム—

玉村 健志

目次

はじめに

- 1 国連コンゴ活動の発足とパターナリズムの内包
 - 2 パターナリズムと政府転覆への関与
 - 3 干渉者の望む政権の形成
- 結び

はじめに

(1) 本稿の目的

近年、国連の平和活動が多角化し、旧ユーゴ地域や東チモールなど、国連が国家建設や暫定統治に乗り出す事例が見られるようになった。そして、そのことに伴って、そこで見られるパターナリズムの問題が指摘されつつある。例えば、ネイル・ロビンソン (Neil Robinson) は、国連による国家建設についての比較研究の中で、国家建設をめぐる議論がパターナリズムに貫かれており、現地の政治アクターの能力や必要性を軽視していると指摘している¹。また、五十嵐元道も、近年の国連による大規模な国家建設活動を、「域外のアクターが特定の地域をその住民に代わって統治する」という統治形式の点で、「トラスティーシップ (信託統治)」の再登場であると指摘したうえで、軍事力行使や、外部アクターの規範に添った大規模な社会改良、現地勢力の政治的選択や主体性の剥奪などのパターナリスティックな権力作用を批判している²。

もっとも、これらの研究が注目する事例は主に冷

戦後の事例であって、国連平和活動³の黎明期の事例において、すでに同様の問題が生じていたことは指摘されてこなかった。よって、本稿の目的は、第一に、同様の行動様式が、冷戦後の事例に限らず、歴史的に繰り返されてきたという事実を指摘すること、そして第二に、国連による国家建設におけるパターナリズムに関して、新たな事例研究を提供することである。そのことによって、他の事例との比較検討が可能になると考えられるからである。

1960年代のコンゴの事例は、国連平和活動の黎明期において唯一国家建設活動がなされた重要な事例である。また、当初その活動を指揮したのが国連平和活動の基礎原理を築いたダグ・ハマーショルド第二代国連事務総長 (Dag Hammarskjöld) であったという意味でも重要だといえる。ハマーショルドの政策形成の内に秘められていたパターナリズムを見出すことによって、国連平和活動の発足期から既に、パターナリズムが国連の国家建設活動の中に内包されてきた可能性を示すことにもつながると考えられるからである。そして、歴史家としてはこの点が重要なのであるが、この事例は、国連による国家建設が行われた事例の中で、唯一、限定的とはいえ、機密文書が公開されている事例である。よって、機密解除を受けた国連や関係諸国の一次資料を用いて、国連事務総長の政策の分析を行った点が、本研究の特色でもある⁴。

¹ Neil Robinson, "State-Building and International Politics: The Emergence of a 'New' Problem and Agenda", Aidan Hehir and Neil Robinson eds., *State-Building: Theory and Practice* (London: Routledge, 2007).

² 括弧内は筆者が付加。五十嵐元道「トラスティーシップの系譜学：人道主義と帝国」日本国際政治学会報告 (2011年11月)。なお、冷戦後の国家建設活動を「新しい信託統治」とみる見方については、例えば以下の文献を参照。Peter Lyon, "The Rise and Fall and Possible Revival of International Trusteeship," *Journal of Commonwealth & Comparative Politics*, vol. 31, no. 1 (March, 1993); William Bain, *Between Anarchy and Society: Trusteeship and the Obligations of Power* (Oxford: Oxford Univ. Press, 2003).

³ 国連による紛争管理の試みは、近年、紛争管理活動の理念型としての「平和創造」、「平和維持」、「平和構築」、「平和強制」や、それらの組み合わせを含むほど、多様化してきている。本稿では、国連による紛争管理の試みを総じて「国連平和活動」(UN Peace Operation)と呼ぶ。

⁴ 建前上、国連事務総長は、安保理や国連総会などから委託された任務を遂行するのがその職務であるが、実際には、様々なイニシアティブを行っている。とりわけ、国連平和活動に関しては、事務総長の「特別代表」が、いわば現場監督として活動を取り仕切っており、その運営に事務総長の意向が大きく働くのは言うまでもない。本稿が事務総長の政策を論ずるのはその意味においてである。但し、国連事務局内の政策立案過程については、現在の国連の内部資料の公開状況では調

ところで、国連の国家建設活動におけるパターナリズムの問題が検討される際に、この事例が対象から外されてきたのは、一つには、この比較的新しい研究テーマに比して、この事例が古い事例であり、政治学者の関心が向きにくかったことが考えられる。そして、いま一つの理由は、コンゴにおけるハマーショルド事務総長の政策が、とすると、アフリカ人たちの意向を尊重した、パターナリズムとは逆の性質のものであるというイメージが提示されることがあることが考えられる。例えば、ブライアン・アークハルト元国連事務次長 (Brian Urquhart) は、「ハマーショルドは、(コンゴにおいて)、もちろん、恩着せがましいような、パターナリスティックな、あるいは新植民地主義的な態度などをひどく嫌った」と記している⁵。ハマーショルドは現在の国連の基礎を築き、脱植民地化と冷戦が交錯する時代にあって、「ダグに任せろ (Leave it to Dag)」という合言葉ができたほどの国際的指導力を発揮した国連事務総長だといわれており、いまなお世界中の多くの人から尊敬を集めている人物である⁶。それだけに、アークハルトの提示するハマーショルド像は、一般的なハマーショルドのイメージと合致しやすい。よって、本稿は、まずこのイメージを修正し、類似の問題が1960年代のコンゴの事例において既に見られていたことを指摘したい。

なお、ハマーショルドに関する研究は、伝記的な性質を持つものや彼の政策に焦点を当てたものが主であり、彼が抱えていたパターナリズムに批判的な検討を加えたものは管見の限りない⁷。よって、従来

の研究に対し、ハマーショルドの別の側面を浮き彫りにすることにより、本稿はハマーショルドに関する研究にも新たな光を当てるものだと見える。

さて、本論に入る前に、本稿における「パターナリズム」という言葉の意味について述べておきたい。Oxford Pocket Dictionaryによれば、paternalとは、「善意の規制 (well-meant regulations) によって、自由や責任を制限すること」だとされる。同様に、『基本外来語辞典』は、「パターナリズム」を「父が子に対するような善意の管理、干渉、温情主義」だと説明している。また、研究書における定義では、例えば著名なパターナリズム研究者であるジェラルド・ドゥウオーキン (Gerald Dworkin) は、「強制を受ける人の福祉、善、幸福、必要性、利益、価値などを専ら理由として正当化されるような、ある人の行為の自由に対する干渉」と定義している。そして、中村直美によれば、法学や倫理学の専門用語の辞書におけるこの言葉の説明として共通しているのは、ある者に対して何らかの干渉・介入が行われており、その干渉・介入がそれを受ける者の利益になるという理由で行われていることだという⁸。本稿では、上記の要素に加えて、意思の押し付けが行われること、すなわち、干渉を受ける者の意思が軽視されることを定義の中に含めたい。すなわち、本稿では、「パターナリズム」を「干渉を行う者が、干渉を受ける者の利益になることを信じて、後者の意思を軽視するようなやり方で干渉することを是認する考え方や行動様式」だと定義したい。ラテン語の pater (父) という語源からもわかるように、干渉を行う者と受ける者の間には、父と子のような関係が想定されており、前者は後者より文化的に成長段階が進んでいると前者が認識していることも、この言葉が指し示す事象の一つの特徴だといえる。

本稿がこのような定義を行うのは、善意で行われた政策の持つ抑圧的な権力作用を浮き彫りにするためである。というのも、本稿で示すように、パターナリズムは権限の濫用を含む抑圧的な権力作用の源

査が難しく、その点が本稿の限界だといえる。もっとも、パンチやダヤルら、事務総長特別代表からのインプットについては、実証できる範囲で、紙幅の許す限り、記述することを試みた。また、ハマーショルドと国連加盟諸国との関係については、紙幅の関係上、別稿に譲りたい。

⁵ Brian Urquhart, *Hammaraskjöld* (New York: Harper & Row Publishers, 1972), 375.

⁶ 国連コンゴ活動の最中に殉死し、その後ノーベル平和賞を贈られたハマーショルドを評価する論文や著作はこれまで数多く出版されてきているが、今世紀に入ってもなお、ハマーショルドを賞賛する趣旨の論文集が発行されている。例としては次の論文集がある。Sten Ask and Anna Mark-Jungvist eds., *The Adventure of Peace: Dag Hammarskjöld and the Future of the UN* (New York: Palgrave Macmillan, 2005).

⁷ そもそも、「コンゴ危機」に関する史的研究は、アメリカ外交史を中心に発展してきたこともあり、一次資料に基づいてハマーショルドのコンゴ政策を体系的に分析する試みは充分になされてこなかった側面がある。

⁸ The Pocket Oxford Dictionary (Oxford: Clarendon Press, 1992); 『基本外来語辞典』東京堂出版、1990年; Gerald Dworkin, "Paternalism," Richard Wasserstrom eds., *Morality and the Law* (Belmont, CA: Wadsworth Pub. Co., 1971), 109. 中村直美『パターナリズムの研究』成文堂、2007年、1頁。

になりうるからである。そして、現地勢力の軽視と抑圧的な権力作用において、冷戦後の国連による国家建設活動と本事例とは共通点を持っているといえる。

さて、本事例においては、ハマーショルド国連事務総長によるパターンリズムは、次の点において発揮された。すなわち、未熟なコンゴ人たちよりも彼ら国連職員の方が、より良いコンゴの未来を築くことができると考えられたことである。このことは、彼らがコンゴ人たちに代わって国家を運営するという発想に結びつくとともに、現地勢力に対する軽視の原因となった。そして、彼らのパターンリズムは、自らの構想に対立するものを失権させ、自らにより都合の良い政権の形成を推進するという内政干渉を引き起こすまでに至る。言うまでもなく、その過程において、現地の人々の意思が重視されることはなかった。

よって、本稿では、国連コンゴ活動にパターンリズムが内包される過程、正統な首相を失権させる過程、外部者が望ましいと考える政権を形成する過程にそれぞれ一節ずつ充てる。本稿を通して、パターンリズムがもたらす、正統性なき強権の発動（内政干渉）と、その問題点を明らかにしたい。

(2) 「コンゴ危機」の発生とハマーショルドのコンゴ政策の概観

「コンゴ危機」(Congo Crisis)は、脱植民地化の過程を基軸としつつ、冷戦がそれに交錯し、複雑な対立関係を織り成しながら展開した。議論に先立って、「コンゴ危機」の発生過程とそれに対するハマーショルドの対応を概説したい。

脱植民地化の過程の中で、コンゴでは様々な対立関係が発生した。宗主国ベルギーからの政治的な「解放」を至上命題に掲げる「急進派」とベルギーとの対立に加え、「急進派」とベルギーとの協調路線を採る「穏健派」との対立があった⁹。また、「急進派」や「穏健派」が集権的な国家を理想としたのに対し、

分権派の指導者たちは、地方の権限を極大化することを模索した。分権派の筆頭が、後述するカタンガの Conakat 党であり、彼らは彼らの自律性の確保を重視し、コンゴからの分離も辞さない構えを見せていた。

コンゴの「独立」¹⁰の過程は、1960年1月末の決定から6月末の実施まで、わずか5ヶ月という短期間だったことで知られている。ベルギー人たちは、「独立」後も彼らがコンゴの国家運営を実質的に担うことに変わりがないと考え、名目的な「独立」付与には抵抗を見せなかったためである。しかし、「独立」が近づくにつれ、コンゴ人の公務員や軍人の間では、ベルギー人たちが軍や行政機構の上層部を占め続けることへの不満が募ることとなった。7月4日、「独立」が彼らの待遇に変化をもたらさないことを告げられたコンゴ兵たちの不満が爆発し、ベルギー人将校に対する反乱と白人一般への攻撃が発生した。人命と財産の保護を理由にベルギー軍が介入してコンゴ兵との間に戦闘が発生し、死者が出るに至った。これがいわゆる「コンゴ危機」の始まりである。

この「危機」を複雑化させたのは、カタンガ州政府によるコンゴからの分離独立運動であった。鉱山地帯の集中するこの州では、州南部に居住する諸部族の連合体と白人入植者が結託して58年に Conakat 党を形成し、カタンガの分離独立を推進してきた。彼らにとって、首都レオポルドヴィルにおける混乱は、分離独立を実現する絶好の機会となり、7月11日、カタンガ政府のモイズ・チョンベ大統領(Moise Tshombe)がカタンガの独立を宣言した。そして、ベルギー政府は、「急進派」と対立する「穏健派」とカタンガ政府の双方を支援しながら、「急進派」のパトリス・ルムンバ首相(Patrice Lumumba)の失権を目指す政策を採ったのである。

ベルギー軍とコンゴ兵の戦闘の発生と、ベルギーによるカタンガ支援を受け、ルムンバ首相とジョゼフ・カサヴブ大統領(Joseph Kasavubu)は、ベルギ

⁹ 「急進派(extremists)」や「穏健派(modérés)」という呼称は、反植民地主義運動における彼らのスタンスから来ている。(旧)宗主国からの「解放」を追及する「急進派」の主張は、(旧)宗主国にとって、敵対的で「過激」であり、それに比して、(旧)宗主国との協調を模索する「穏健派」の態度は、まさに「穏健」に映った。

¹⁰ コンゴにおいては、ベルギーがコンゴに主権の移譲(いわゆる「独立」の付与)を行った後も、ベルギー人たちが軍や行政機構の中核を握っていた。よって、「独立」は多分に名目的な側面があった。このため、本稿では「独立」という言葉を、国家主権の移譲を指す言葉として、鍵括弧つきで用いる。

一の「侵略行為」から国土を守るための支援を国連に求め、支援を得られなかった場合、「バンドン条約諸国」に軍事支援を要請することを示唆した。これにより、国連の軍事的関与が発生することになる。ハマーショルドは、この「バンドン勢力」を中国共産党の意味だと解釈し¹¹、国連が軍事的なプレゼンスをコンゴに築くことによって、共産主義諸国の関与を防ごうとしたからである。このため、当初、技術援助に留まるはずだったコンゴへの国連の支援は、国連軍の派遣を含む大規模な活動へと拡張されることになった¹²。ハマーショルドは、技術援助という土台の上に、平和維持活動を接木することにし、そのことで自国民救助を理由に介入したベルギー軍の撤退を可能にしようとした。スエズ危機において、軍事介入した英仏軍と国連緊急軍が入れ替わることで、英仏の撤退に道筋をつけた前例があったからである。

ハマーショルドの方針の根底には、「防止外交（preventive diplomacy）」と呼ばれる冷戦政策があった。ハマーショルドは、かねてからアフリカが冷戦の「外」にあり続けることが重要であり、「問題を可能な限り冷戦の軌跡から離しておく」べきだと考えていた¹³。彼が「防止外交」と名づけたこの政策方針によれば、国連の役割は、まだ東西対立に巻き込まれていない地域で紛争が発生した場合に、国連のプレゼンスによって、紛争を局地的なものに留め、東西対立へとエスカレートしないようにすることであった¹⁴。

この政策は、コンゴの内政に対する相当程度の介入を必要とした。というのも、ルムンバ首相が、ベルギー軍の撤退とカタンガ政府の後ろ盾となっているベルギー人たちの退去を達成すべく、ソ連への支

援要請を示唆し続けることで、ベルギーや国連に圧力をかけようとしたからである。ゆえに、ハマーショルドは、国連がコンゴの行政機構を実質的に統治し、コンゴに対して提供される全ての援助を国連が一元的に管理することで、ソ連の関与を排除しようと試みた。それは、国連がコンゴ人に代わって国を統治し、コンゴに流入する全ての援助を管理し、そのことによって、ソ連の関与を防ぐ政策であった。このように、新興国への技術援助、その拡張としての国連による暫定統治、「防止外交」の三位一体の構想が、ハマーショルドのコンゴ政策の枢要であった¹⁵。

本稿でみるように、この政策の追求は、最終的にはルムンバの失権と、ハマーショルドらにとってより都合の良い「穏健派」の主導する政権の樹立へとつながることになる。ソ連の関与を防ぐ上で、ルムンバの失権が必要だと考えられたからである。彼らは、それが彼らの干渉を受けるコンゴ人たちの利益になると信じていた。しかし、その過程で、彼らはコンゴ人たちの意思を軽視して、コンゴ人たちによって選出された正統な首相の失権を支援し、議会での支持基盤を持たない「穏健派」の政権を作り出そうとした。そのために、彼らは一年にも渡る中央政府の瓦解と、その間における各地での権力闘争を招くことになる。そして、彼らが促した「穏健派」と「急進派」の決裂は、政権再興の過程では修復されず、「第二次コンゴ紛争」の遠因を作ることになる。

1 国連コンゴ活動の発足とパターナリズムの内包

ハマーショルドのパターナリズムは、国連コンゴ活動（略称 ONUC）の発足当初からみることができ。この節では、コンゴ人たちが「準備不足」で「独立」を達成したと認識される中、国連による国家運営の肩代わりが模索され、その中でコンゴ人たちの意思が軽視されていく過程を述べたい。

アフリカにおける脱植民地化の進展に伴い、50年代半ば頃から、ハマーショルドは、アフリカにおける国連の役割に関心を示し始めた。「独立」を達成したばかりの国々は、経済発展や行政機構の運営において困難を抱えることが多かったからである。コン

¹¹ Telegram 62 from New York to Secretary of State (以下、Telegram NY62 のように表記)、13-7-1960, 770G.00, UPA, reel2.

¹² この経緯の詳細については、拙稿『「コンゴ危機」におけるハマーショルドの政策目標』『一橋法学』第10巻第3号（2011年）を参照。

¹³ SG/ 900, 8-3-1960, quoted in Urquhart, 386; “From Transcript of Press Conference, New York,” 5-2-1959, PPSG 326.

¹⁴ “Introduction to the Fifteenth Annual Report,” UN Doc. A/4390/Add.1, 31-8-1960, PPSG 130-34; なお、「防止外交」については以下を参照。Inis Claude, *Swords into Plowshares: the Problems and Progress of International Organization*, 2nd ed., (New York: Random House, 1959), chp. 14; Thomas Boudreau, *Sheathing the Sword: The U.N. Secretary-General and the Prevention of International Conflict* (NY et al.: Greenwood Press, 1991), 50-52; 香西茂『国連の平和維持活動』有斐閣、1991年。

¹⁵ この三位一体の構想の形成については、拙稿、前掲論文を参照。

ゴの問題も、当初は国連による技術援助の問題として捉えられた。

ハマーショルドの考えでは、新興国ではそれまで依存していた欧州公務員の帰国などにより、「必然的に不可避免的に行政職員のある程度の流出」が起るため、国連には、「一時しのぎの (stopgap) 組織」としてそこに入る特別の責任があった¹⁶。中でも、人材の問題に関しては、ハマーショルドは、国連を通じて途上国に人材を提供するOPEX プログラムを立ち上げ、既に国連総会の承認を受けていた。本稿における議論との関係で注目したいのは、ハマーショルドによれば、同制度は建前上、「誰からも強制されず」、受入国政府の要請によってのみ始められ、その政府の決定で終了するという意味において、「植民地主義的な取り決めの性質とは正反対のもの」であったという点である¹⁷。このように、ハマーショルドは、受け手の自主性を重んじる態度を見せることで、国連による支援と植民地主義的支配との対比を強調していた。しかし、後述するように、実際にはコンゴにおける国連の活動は、支援の受け手であるコンゴ人たちの意思に重きをおかないような形で進められていくことになる。

コンゴに関しても、ハマーショルドは、国連が積極的に支援を行う姿勢を示した。ハマーショルドは、59年12月下旬から6週間に渡るアフリカツアーの中で、60年の7月にベルギーからの「独立」が予定されていたコンゴにも訪れている。その際、ハマーショルドは現地のベルギー人や数人のコンゴ人指導者に会い、経済開発計画や資金受け入れの面で、国連や国連専門機関との協力には、宗主国にもメリットがあることを強調した。ニューヨークへ戻った後も、同事務総長は、ベルギーの国連大使と会談し、国連の新興国支援には、国連事務局から現地に「常駐代表」を派遣する手法があることを説明した¹⁸。このように、国連のコンゴに

対する支援は、当初、人材提供や小規模の財政支援を軸とした新興国支援策が中心となるはずであった。

ハマーショルドは、コンゴへの「常駐代表」の派遣を決め、併せて、コンゴの独立式典を機に、ラルフ・バンチ国連事務次長 (Ralph Bunche) を現地に派遣して、支援のための調査をさせることにした。そして、ハマーショルドの長年の友人で、当時リビアの鉱山事業に携わっていたスウェーデン人実業家ステュレ・リネル (Sture Linner) が、バンチの補佐として同行することになった¹⁹。しかし、コンゴ政府との協議のために訪れたバンチの役割は、「独立」直後に発生した「公安軍 (force publique)」のコンゴ兵による反乱とベルギー軍の介入により、大きく変更されることとなった。

このような「騒乱」の発生について、西側諸国では、「独立」に対する準備不足にその原因をみる見方が広まっていた²⁰。上述のように、コンゴ人たちの不満の爆発は、ベルギー人からの権限の移譲が充分に行われなかったことに大きく起因していたが、この点がおきざりにされているのがこの準備不足論の一つの特徴でもある。

国連コンゴ活動の発足の直後に、バンチが「ここでの、主要な仕事は、無秩序の大半の原因である公安軍の建て直し」だと述べたように、コンゴ人の訓練不足を「騒乱」の原因と見る見方は、国連職員の間にも少なからずもたれていた²¹。このため、国連がコンゴに技術援助を提供することでこの事態に対処するという構図ができあがった。そして、その構想はすぐに拡張され、ハマーショルドは、国連がコ

AF I-1 Congo février 1960, Archives diplomatiques, Archives du Ministère des Affaires Étrangères, Bruxelles (以下 AMAE と略記)。

¹⁹ Telegram NY1357, 9-6-1960, 770G.00, Robert Lester ed., *Confidential U.S. State Department central files, Congo, 1960-January 1963*, A UPA Collection from LexisNexis (以下 UPA と略記), reel2。

²⁰ ベルギーでは、保守派が「独立」の付与が時期尚早だったとして政府を批判し、コンゴに隣接する英領ローデシアでは、白人たちは、「訓練されていない人々に政権を渡した」失敗を、英領では避けるべきと主張した。また、国務省のアフリカ問題担当の次官補も、「基本的に、コンゴにおけるトラブルは、独立が、いかなる準備や、ごくわずかな政治的な基盤の構築もなく、与えられたという事実から生じている」とする覚書を作成している。Telegram 101 from Brussels to SecState, 10 July 1960, 770G.00, UPA microfilm, reel2; Telegram 41 from Salisbury to SecState, 11 July 1960, *ibid.*; “A Summary of the Political Situation,” attached to a note from J.C. Satterthwaite to Secretary Herter, 10 July 1960, *ibid.*

²¹ Incoming Code Cable 94 (以下, Incoming94 のように表記) from Bunche to SecGen, 18-7-1960, S0217-0001-02, United Nations Archive, New York (以下 UNA と略記)。

¹⁶ “Statement in the Economic and Social Council on Assistance to Former Trust Territories and Other Newly Independent States in Africa,” 14-4-1960, Andrew Cordier and Wilder Foote eds., *Public Papers of the Secretaries-General of the United Nations* (以下, PPSG と略記), vol. IV (New York: Columbia Univ. Press, 1974), 567-68.

¹⁷ “From Transcript of Press Conference, New York,” 4-2-1960, *ibid.*, 535.

¹⁸ ロリダンの外相宛の書簡によれば、技術援助のための「常駐代表」は、この時点で40人ほどおり、彼らの任務は、被支援国から国連への援助要請について助言を与え、専門家が滞在する際の行政的問題を取り扱い、政府の省庁間のリエゾンを確保することであった。D.412A (WL/LW) No S.408 d'ordre 314, Secret, de W. Loridan à P. Wigny, 12-2-1960,

ンゴを暫定的に統治する計画を持つに至る。未熟なコンゴ人に代わって国連が国を治めるという発想に、彼らのパターンリズムが秘められていた。

7月13日に開かれた国連安全保障理事会（以下、安保理と略記）におけるハマーショルドの説明によれば、これはコンゴにおける「治安行政」の再建の問題であり、短期的には国連軍が「秩序」を維持することで、自国民保護の目的で介入したベルギー軍の撤退を可能とし、長期的には国連の技術援助によって、コンゴ政府の治安維持組織が適切に機能するようにすべく支援を行う方針であった。言い換えれば、国連の目標は、「準備不足」で「独立」したコンゴ政府に対して国家機構建設の支援を行うことであり、それまでの「一時しのぎ取り決め」として国連軍が治安を維持することであった。

こうして、国連は、コンゴの国家建設に乗り出すこととなった。ハマーショルドの説明によれば、ベルギー軍撤退の確保はあくまで一時的なタスクであって、活動の本来の目的は、「独立」の準備を整える十分な時間を取れなかった国に、技術援助を与えることであった²²。それは国連史上初の試みであり、ハマーショルドはそれを「低開発国と国連の歴史における、新しく決定的な章の始まり」と評した²³。

この取り組みは、建前上はコンゴ人による国家建設に対する支援だったが、実際には国連自体による暫定統治の試みだったといえる。ONUCの活動が国家建設に対するコンゴ人たちへの支援だったのか、あるいは、国連自体が行政機構を運営する暫定統治であったのかについては、議論が分かれてきた。ONUCにも従事したアークハルト元国連事務次長は、著書『ハマーショルド』の中で、コンゴ人たちが「新たな形の植民地主義の後見」だとみなさないように、「あらゆるステップにおいて、経験のないコンゴ人指導者たちと協力を維持することが不可欠だった」と記し、彼らがコンゴ人たちの意思を尊重し

ながら行った、コンゴ人たちへの支援だったことを示唆している。これに対し、スティーヴン・ラトナー（Steven Ratner）は、ハマーショルドの言う「コンサルタント」たちが、実際には、コンゴ行政における政策決定の大半を担ったと指摘する²⁴。

国連事務局の内部資料を読む限り、後者の方が実情に近かったといえる。ハマーショルドは、コンゴ政府の各省の上層部につける「顧問」を、名目的には ONUC 民政部門の責任者であるリネルに助言する顧問とするものの、彼らは「実際には、（顧問という）帽子を被る、政府の様々な省庁の影の事務次官」だと考えていたからである。つまり、リネルの法務顧問は、「事実上、法務事務次官として機能する」予定であった。但し、建前上はあくまでコンゴ人による国家建設への支援であるため、それは「我々が口にはしないこと」であった²⁵。

問題は、暫定統治構想があったこと自体よりも、それが国連職員によるコンゴ人軽視につながったことにあった。そのような兆候は、この時点で既に表れ始めていた。例えば、ハマーショルドは、アメリカの国連大使との会談の中で、この試みが「国連が、初めて政府のない国を支援する」ケースであることを語っている。実際にはコンゴ政府は存在していたが、この言葉は、コンゴの行政機構を運営するのがコンゴ人ではなく国連だという意識の表れだといえる。この国連大使の公電によれば、このため、「国連のプログラム全体が、コンゴ政府の明確な形での承認なく進んで」いた²⁶。

このようにして、「準備不足」で「独立」を得たコンゴ人たちに代わり、国連の提供する「影の事務次官」たちが暫定的に国を統治する構想がもたれる中で、彼らのパターンリズムが活動の中に内包されていくこととなった。そして、このようなハマーショルドの態度は、彼が「子供」だとみなしたルムンバ首相ら「急進派」への蔑みによって増幅されることになる。

²² ベルギー軍撤退確保という目的に関しては、ハマーショルドは、ONUC 司令官への公電の中で、「（国連）軍のプレゼンスは今年を超えることはなさそうだ」との見通しを示していた（引用文の括弧内は筆者による）。Outgoing from SecGen to Von Horn, 14-7-1960, S0217-0001-5, UNA.

²³ Outgoing from SecGen to de Seynes, 19-7-1960, Incoming/outgoing code cables June60 - Sept61, box1, Congo Crisis, Dag Hammarskjöld Samling (L179), Kungliga Biblioteket, Stockholm（以下 KB と略記）。

²⁴ Steven Ratner, *The New UN Peacekeeping: Building in Lands of Conflict after the Cold War* (NY: St. Martin's, 1995), 106.

²⁵ 括弧内は筆者による。Outgoing from SecGen to Bunche, 24-7-1960, L179, KB.

²⁶ Telegram NY121, 18-7-1960, Glenn LaFantasie et al. eds, *Foreign Relations of United States, 1958-1960, vol. 14*, (以下, FRUS と略記), 320.

2 パターナリズムと政府転覆への関与

国際関係史の分野では、機密文書の公開に伴い、ルムンバ政権崩壊における、国連事務局、アメリカ、ベルギーの関与が徐々に明らかにされてきた²⁷。今やハマーショルドがルムンバの失権を願い、対抗勢力である「穏健派」を支援したことは疑う余地がない。その一方で、ハマーショルドとルムンバが決裂に至った原因自体については、まだ解明の余地が残されている。本稿は、その中でも、ハマーショルドのパターナリズムが果たした役割に注目する。ハマーショルドが、ルムンバを説得するという選択肢を放棄した大きな原因となったと考えられるためである。

国連コンゴ活動を進めていく上で、ハマーショルドが受入国の首相であるルムンバの理解を得ることを放棄したのは、国連職員たちのルムンバに対する侮蔑観と無関係ではなかったといえる。そして、カタンガ問題の処理や、ルムンバのソ連接近をめぐる、両者の対立が昂じるにつれ、ハマーショルドは、ルムンバを首相として不適格だとみなし、「穏健派」指導者たちこそが「コンゴの未来の礎になるべき」だと考えるようになる。そこには、誰か国を治めるべきかを外部者が判断するというハマーショルドのパターナリズムが見え隠れしていた。そして、ハマーショルドは、「穏健派」による政府転覆活動を影から支援していくこととなる。

(1) ルムンバに対する侮蔑観

バンチが初対面の際の印象を「ビジネスライクで、知的で知識があり、素早く、最もまじめ」だと述べたように、国連職員たちは当初、ルムンバに対して好印象を持っていた。しかし、ルムンバが雄辯で恫喝的な外交を展開することにより、その評価はすぐに「完全に狂人的な子供 (utterly maniacal child)」へ

と急落することになった²⁸。ルムンバが厄介者だとみなされるようになるにつれ、ハマーショルドらは、彼を説得するのではなく、迂回する形で物事を進めるようになる。そこには、彼らが子供だとみなしたルムンバよりも、彼ら自身の方がより良いコンゴの未来を形成できるという確信が垣間見えた。

国連職員たちのルムンバ評価が急落した大きな原因となったのは、ルムンバがソ連招聘をちらつかせることで国連に圧力をかけようとしたことであった。ベルギー軍が撤退せずに国連軍と協働するという噂を懸念したルムンバは、7月17日、72時間以内にベルギー軍撤退を確保するよう国連に求め、それが果たされない場合には、ソ連に支援を求めると通告した。こうした恫喝的な外交手法により、ルムンバは国連職員や西側諸国から厄介者とみなされるようになった。

バンチがルムンバを子ども扱いした様子は、このルムンバの「最後通牒」をめぐるやり取りにも表れている。バンチの公電によれば、バンチが最後通牒を拒否したと伝えた地元紙を握り締めて怒りを露にするルムンバに対し、バンチがその記事を否定したにも関わらず、ルムンバが言葉を続けたため、「私の言葉を疑うのかと、きっぱりと詰問した (demanded flatly)」ところ、ルムンバは「急におとなしくなって (climbed down)」、その後は会談中おとなしい態度で接したという。既に二度伝えたことを「サプライズだ」と述べたルムンバに対する、バンチの侮蔑感には想像に難くない。この会談中、ルムンバは、国連活動の派遣が彼の要請によるものであり、国連がその義務を果たさないならば退去を要請できると主張したが、バンチは「それを無視した」と報告している²⁹。ルムンバの発言は、受入国同意の原則という、国連平和維持活動の大原則を述べたものであり、バンチの態度は明らかに一国の首相の発言に対する態度ではなかった。

²⁷ Lise Namikas, "Battleground Africa: The Cold War and the Congo Crisis, 1960-1965", Ph.D. Dissertation, University of Southern California, 2002, 183-84; Carole Collins, "The Cold War Comes to Africa: Cordier and the 1960 Congo Crisis," *Journal of International Affairs*, vol. 47 no. 1 (1993); Ludo De Witte, *The Assassination of Lumumba* (London and New York: Verso, 2001), 16-20; Alan James, *Britain and the Congo Crisis, 1960-63* (London: MacMillan Press Ltd., 1996), 69-72; 三須拓也「コンゴ国連軍と反ルムンバ秘密工作一九六〇年七月～九月」『名古屋大学法政論集』第193号(2002年)。

²⁸ Incoming16 from Bunche to SecGen, 5-7-1960, S-0217-0001-02, UNA; Incoming80 from Bunche to SecGen, 16-7-1960, *ibid.*; バンチは、ベルギーのファンデンボシュ大使に対しても、ルムンバを「無分別な子供」だと述べている。Télégramme 335 de Léopoldville à BELEXTE Bruxelles, 16-7-1960, boîte 301/1, Papiers Jean Van den Bosch, Centre d'Études et de Documentation Guerre et Sociétés contemporaines, Bruxelles.

²⁹ Incoming ONUC29 from Bunche to SecGen, 20-7-1960, S-0217-0001-02, UNA.

ハマーショルドのルムンバに対する評価も低かった。両者はルムンバが訪米した際に会談したが、ハマーショルドはルムンバに対して良い印象を持たなかった。この会談で、ルムンバは、ベルギー軍撤退の期限を決めるようにハマーショルドに迫ったようであり、ハマーショルドによれば、「(撤退の)タイムテーブルに関する不可能な期待や、公安軍の使用という脅し」などに対して「断固としていなければならなかった」という³⁰。この会談を受け、ハマーショルドはカナダ外務省に対し、ルムンバが「友好と率直さには反応がよく、感受性が強いが、様々な影響力に揺り動かされる傾向」があり、「無知で、とても猜疑心が強く、卒がないが、考えが未熟で、全アフリカ指導者の中で規模が最も小さい」との評価を伝えている³¹。

このような、ルムンバに対する国連職員たちの侮蔑感、この後、ルムンバの持つ国内的な影響力に対する過小評価と、彼を除去すれば問題が解決するという短絡的な見方へとつながっていくことになる。

他方で、「穏健派」と呼ばれるコンゴ人指導者たちに対する国連職員たちの評価は高かった。ベルギーの支配からの解放を至上命題に掲げるルムンバら「急進派」に対し、「穏健派」指導者たちは、コンゴの経済発展においてベルギーが果たす役割を重視し、協調路線を主張していた。冷戦との関係でいえば、ベルギーとの政治的経済的関係の存続を重視する彼らは、ベルギーとの関係を切ってソ連に近づくこととするルムンバの方針に強く反発した。彼らは、ルムンバのソ連に対する支援要請がコンゴの共産主義化に道を開くことを危惧し、ソ連の関与を排除するハマーショルドの政策を支持した。よって、彼らは親ベルギーであるだけでなく、親国連でもあった。

ハマーショルドも、彼らを「国連にとって好ましいものたち」、「真の誠実さや知性、ナショナルな責任感」を持つ「コンゴの政治的将来の礎となるベ

き者たち」と評価した³²。そしてこの言葉には、コンゴの未来を担うべき者が誰なのかを、外部者であるハマーショルドが判断するという意味において、彼のパターンリズムが表わされていたといえる。そして、このパターンリズムは、「穏健派」によるルムンバ政権の転覆を後押しすることにより、具現化することになる。

(2) パターンリズムに対するルムンバの反発

上述のように、ハマーショルドは、国連が実質的に国を統治することでコンゴに流入する援助を排他的に管理し、それによってソ連の関与を排除する構想を立てた。しかし、このようなパターンリズムの漂う構想を、ルムンバは好まなかった。それは、彼の外交上の自由度が制約されることを意味しており、彼にとって国連への過度の依存は、勝ち取った「独立」を損なうものにみえたからである。

ルムンバの至上命題は、ベルギーによる支配からの解放であった。上述のように、ベルギー人たちは、コンゴの「独立」を可能な限り名目的なものに留めようとし、「独立」後もベルギー人たちがコンゴの国家行政の上層部を握り、行政運営を継続することを想定していた。ベルギー政府は、コンゴ兵の反乱が発生すると、条約に違反してコンゴ政府の同意なく軍事介入を行った。そして、ルムンバ首相とカサヴブ大統領がベルギー政府に外交関係の断絶を通告すると、カタンガ体制を支援して親ベルギーのカタンガ政府を中心としたコンゴの再編に乗り出したのである。従って、ベルギー軍を追い出し、コンゴ全土を政府の統治下におくことが、ルムンバにとっての最優先課題だといえた。

そして、ルムンバは、この目的のため、米ソを競わせて両国の支援を引き出そうと試みた。当時、米ソにとって、新興国が東西いずれの陣営に入るかが重要だったため、ルムンバはこのことを利用して米ソに支援競争を行わせようと考えたからである。

これに対し、ハマーショルドの優先事項は、冷戦闘争がアフリカに及ぶのを防ぐことであった。それ

³⁰ 括弧内は筆者による。Outgoing (Top Secret), 24-7-1960, Incoming/outgoing code cables, L179, KB; Thomas Kanza, *The Rise and Fall of Patrice Lumumba: Conflict in the Congo* (Boston: G. K. Hall & Co., 1979), 238-240.

³¹ Extract from Briefing Book for the Prime Minister, 29-31 July 1960, *Documents on Canadian External Relations* (以下 DCER と略記), vol. 27, 25.

³² Telegram NY349, 7-8-1960, *FRUS*, 1958-1960, vol. 14, 395-99; Incoming B282 from Secretary-General (Leopoldville) to Cordier, 1-8-1960, Incoming/outgoing code cables, L179, KB.

だけに、ハマーショルドの目から見て、米ソに援助合戦を行わせようとするルムンバの手法は危険なゲームに見えた。このため、「ルムンバの全方面への支援要請が、技術者とともに入ろうとするソ連ブロックの試みにつながる」³³ことを懸念したハマーショルドは、国連がコンゴに流入する援助を管理することで、これを防ごうと試みた。国連が行政機構を運営し、コンゴへ提供される技術援助の一元的な窓口となれば、ソ連の関与を排除することができると考えられたからである。

もちろん、ハマーショルドは国際的な平和のためにこれが必要な施策だと考えていた。しかし、この「善意」による干渉（すなわちパターンリズム）にルムンバは反発した。国連による管理は、ルムンバにとって彼の外交上の自由度や、米ソに対する交渉力を奪うものであり、コンゴに対する主権侵害だと捉えられたからである。そもそも、国連がベルギー軍撤退を依然として確保できておらず、国連自体の有用性が未知数である状況において、国連以外の選択肢を失うのはルムンバにとって好ましくなかった³⁴。加えて、ルムンバの目から見た場合、国連に対する過度の依存は、コンゴの主権に対する制約であり、ひいては、ようやく勝ち取った「独立」を損なうものだといえた。援助元を自ら選ぶことができなければ、依存相手が宗主国から国連に代わるだけのことだったからである³⁵。

このため、ルムンバは、7月下旬にアメリカとカナダを訪れ、国連の枠外での二国間援助を求めた。とりわけカナダでは、ルムンバはフランス語を話す技術者を得ようとした。しかし、アメリカはアフリカサハラ以南地域への援助自体に消極的であり、ソ連との援助合戦に巻き込まれるのを避けるうえでも、国連による一元管理には賛成であった。結局、

ルムンバは、アメリカとカナダのいずれでも二国間援助の確約を取り付けることはできず、次第にソ連の方を向くようになり、オタワやニューヨークでソ連の外交使節と接触を開始した。

アメリカを発つ前に、ルムンバは国連本部で事務総長執務補佐官のアンドリュー・コーディア（Andrew Cordier）と会談し、ハマーショルドへの批判を強めた。ルムンバは、未だに国連軍がカタンガに派遣されていないことを取り上げ、事務総長がベルギーの意向のみを考慮し、コンゴ政府の要請と安保理決議を無視していると迫った³⁶。コーディアから報告を受けたハマーショルドは、「西で失望した」ルムンバが、「東とつるみ、国連とも敵対することを決めた」と危機感を募らせた³⁷。ルムンバの「無責任なやり方」が「（コンゴの）中に入りたがっている者（ソ連）」に扉を開くことが懸念されたからである。ハマーショルドは、「もし彼らが国連の枠外で入り込めば、当然、競争がフル回転して」、「経済的な冷戦」が発生することを恐れていた³⁸。

こうして、両者の対立と相互不信が形成され始めた。ハマーショルドは、ルムンバの「全方面への支援要請」がソ連に「扉を開く」ことを懸念し、国連がコンゴ人に代わってコンゴに流入する援助を管理することでそれを防ごうと試みた。このパターンリズムの漂う計画にルムンバは強く反発した。帰国後に行った演説で、ルムンバは、一部の新聞が全てを「国連の保護」の下で行うことを主張していることを批判し、「コンゴは決して国連の植民地にはならず、国連の信託統治領にはならない」と宣言し、国連の活動自体を打ち切る可能性をも示唆した³⁹。結局、ハマーショルドがルムンバの動きを封じ込めようとするればするほど、ルムンバはその頸木から逃れるべく他の支援先を探し、次第にソ連の方へと向くことになった。

³³ Telegram NY121, op. cit.

³⁴ アメリカのハーター国務長官との会談でも、ルムンバは、ベルギーの撤退に関し、「もし国連が満足を与えなければ、アメリカや他の国が助ける必要がある」と述べ、国連以外の選択肢を排除していないことを示唆した。Memorandum of Conversation, Secretary Herter and Prime Minister Lumumba, 27-7-1960, *FRUS*, 1958-60, vol. 14, 359-366.

³⁵ カナダ外務省での会談で、ルムンバは、国連の技術援助がコンゴの独立とは完全には両立せず、国連の技術者が引き上げられた場合、コンゴはゼロから始めなければならなくなるため、国連のみに依存するのではなく、国連枠外での二国間援助を希望することを力説している。*"Conversations with Mr. Lumumba,"* 1-8-1960, *DCER*, vol. 27, 28-30.

³⁶ Record of Conversation between Prime Minister Patrice Lumumba of the Republic of the Congo and Mr. Andrew W. Cordier, Executive Assistant to the Secretary-General, 1-8-1960, Congo General - Political overall chronological story, box1, Congo crisis 1960-61, L179, KB.

³⁷ Incoming B304 from SecGen (Leopoldville) to Cordier, 2-8-1960, box1, Incoming/outgoing code cables, L179, KB.

³⁸ 括弧内は筆者による。Incoming B293-94 from SecGen (Leopoldville) to Cordier, 1-8-1960, box1, Incoming/outgoing code cables, L179, KB.

³⁹ Jean Van Lierde ed., translated by Helen Lane, *Lumumba Speaks: The Speeches and Writings of Patrice Lumumba, 1858-1961* (Boston, Toronto: Little, Brown and Company, 1972), 311-12.

(3) ルムンバとの決裂

このような状況の中、最終的にハマーショルドとルムンバの決裂をもたらしたのは、国連軍のカタンガ進駐をめぐる問題であった。但し、後述するように、両者の決裂を必然的な結果だったと捉えるのは正しくない。カタンガをコンゴに再併合する必要性について、両者の目標は一致していたからである。両者がこの点について相互理解を深めていれば、両者の協調は充分に可能だったといえる。そして、国連平和活動の受入国の首相に活動方針を説明する責任は、ハマーショルドの方にあった。しかし、ハマーショルドのルムンバに対する侮蔑感とパターンリズムは、そのような説明や説得を不要だとする態度にハマーショルドを向かわせることになる。

さて、この時点でのカタンガ問題の焦点は、いつ、そしていかにして国連軍のカタンガ進駐とベルギー軍のカタンガからの撤退が実現されるかという点にあった。国連軍は既にカタンガ以外の地域への進駐を終えていたが、カタンガ政府とベルギー政府は、国連軍のカタンガ入り、より正確には、重要な経済的拠点であるカタンガからのベルギー軍の撤退に反対していた。他方、ベルギー人たちの支援の下にカタンガ体制が固まっていくことに苛立った「急進派」指導者たちは、一刻も早い国連軍のカタンガ進駐を望んでいた。このため、ハマーショルドが8月上旬にコンゴを訪れた際、「急進派」のアントワヌ・ギゼンガ副首相 (Antoine Gizenga) からカタンガ問題が放置されているとの苦言を受けた⁴⁰。コンゴ滞在中、ハマーショルドは、コンゴ政府の閣議に参加したが、そこでの討議はカタンガ問題に終始し、それ以外の問題にはほとんど関心が示されない状態であった⁴¹。

そもそも、カタンガの分離独立問題について、コンゴ政府の指導者たちとハマーショルドとでは認識に大きな隔たりがあった。前者にとって、コンゴの歳入のおよそ三分の二にも相当する鉱山資源を産出

するカタンガ州の分離独立は許容できるものではなかった。とりわけ、「急進派」指導者たちにとっては、カタンガの独立運動がベルギー人の後ろ盾を得ていることは、植民地支配の継続の問題にもみえた。他方、ハマーショルドは、分離運動が「部分的にはベルギー官僚によって促されている」ことは認識していたが、基本的には、分権派と集権派の対立の問題だと捉えていた⁴²。また、ハマーショルドの考えでは、彼はベルギーとコンゴの二つの世論を扱っており、コンゴの「子供たちの集団の要求を満たす」ために、もう片方の世論に騒乱を起こすことはできなかった⁴³。この発言からも窺えるように、ハマーショルドは、カタンガ体制が固まることへのコンゴ人たちの焦燥感を理解しようとせず、それを単に「子供たち」の要求だと切り捨てていた。

このような認識から、ハマーショルドは、コンゴ政府とカタンガ政府との対立には関知しない態度をみせることで、カタンガへの国連軍の進駐を達成しようと試みた。このため、ハマーショルドは安保理に報告書を提出し、カタンガの分離問題には関知しない方針を示す一方で、12日には自らカタンガに赴いてチョンベ大統領と会談し、国連軍の進駐とベルギー軍のカタンガからの撤退に対する同意を取り付けた。この際、ハマーショルドが、カタンガ政府がベルギー人「技術者」を雇用することを容認した⁴⁴ため、ベルギー「軍」の撤退は決まっても、ベルギー「軍人」や政治顧問は、「技術者」としてカタンガに留まることになる。

そして、このハマーショルドの対応は、ルムンバを激昂させた。一つには、ハマーショルドが内政不介入を理由にコンゴ政府代表のカタンガへの輸送を拒んだことがあった。これにより、コンゴ政府がカタンガにアクセスできない状況は、継続することになったからである。これは、彼らにとっては、ベルギー人のカタンガ支援を放置することにも等しく、

⁴⁰ ギゼンガはレセプションでの演説において、ベルギー軍の代わりにコンゴ軍が武装解除されており、国連がカタンガの独立体制が固まるのを放置しているとの不満を述べた。Jules Gerard-Libois and Benoit Verhaegen ed., *Congo 1960: Les Dossiers du C.R.I.S.P* (Bruxelles: Centre de Recherche et d'Information Socio-Politics), tome II, 615.

⁴¹ Incoming B272 from SecGen to Cordier, 31-7-1960, S0217-0001-03, UNA; Incoming B294, 1-8-1960, Incoming/outgoing code cables, L179, KB.

⁴² Incoming B272, op. cit.; Incoming B244 from Secretary General to Cordier, 29-7-1960, S0217-0001-03, UNA.

⁴³ Incoming B-293, op. cit.

⁴⁴ «Compte rendu analytique de la seconde réunion de Monsieur Hammarskjöld et du gouvernement Katangais en date du 13 août 1960», Entretiens ONU-Katanga Eville, boîte Katanga II, Archives Frédéric Vandewalle, Musée Royal de l'Afrique centrale, Tervuren (以下、MRACと略記)。

受け入れがたいものであった。もう一つには、ハマーショルドがカタンガに向かう途上で、首都で一泊したにも関わらず、コンゴ政府と協議を持たなかったことがあった。このため、ルムンバは、ハマーショルドに書簡を送り、安保理決議 143 がコンゴ政府との協議を謳っているにも関わらず⁴⁵、ハマーショルドが政府との協議なくしてカタンガ政府と交渉を行い、幾つかの約束を与えたと非難した。

これに対し、ハマーショルドは「事実無根で不当な主張や、安保理決議の解釈について、ここで討議する理由はない」として、質問や要求には一切返答せず、「国連軍のカタンガへの展開によって、あなたの言ってきたことが間違いだったとわかったはずだ」と突っぱねた。この態度が火に油を注ぎ、ルムンバは終に、「コンゴの政府と国民は、国連事務総長に対する信頼を失った」と言い放ち⁴⁶、さらに 17 日の記者会見で、「我々の軍事援助要請を、他の政治目的にだけ利用しようとする向き」があれば、国連活動に対する要請を撤回する用意があるとのめめかし⁴⁷。この「レオポルドヴィルの騒音と憤激」について、ハマーショルドは、側近のコーディアへの電信の中で、「もし理性が一貫して保たれるなら(中略)愚か者は敗走する」と切り捨てた⁴⁸。こうして、両者の関係は決裂状態に陥った。

この決裂を必然的な結果だったと捉えるのは正しくない。両者の相互不信や偏見、そして感情的な側面によるところも大きかったからである。そもそも、ベルギー軍の撤退とカタンガの分離運動の終結という最終的な目標において、ハマーショルドとルムンバは共通の目標を持っており、ルムンバがそのことを理解すれば、この点で両者は足並みをそろえ

ることができたはずであった⁴⁹。何より、両者は同等の立場ではなく、ルムンバが選挙で選ばれた正統な首相だったのに対し、ハマーショルドはあくまで外部の支援者に過ぎなかった。そして、平和維持活動が受入国の同意に基づくものである以上、後者には、その活動方針について受入国首相の理解を得る責任があるはずであった。両者が上記の二つの目標に向けて協調できていれば、ルムンバにはソ連の支援を得る理由もなくなり、ルムンバの失権も避けられた可能性は充分にあったといえる。

しかし、ルムンバに対する不信と侮蔑感は、むしろ、安保理の承認さえ得れば、「子供」である受入国首相の了承は必要としないという態度に、ハマーショルドを向かわせた。というのも、ハマーショルドは、彼が自分の立場を表した報告書を安保理に提出すれば、反対する見解にはソ連とポーランドの二票しか入らないため、彼の立場が是認され、活動を継続できると見ていたからである。このため、ハマーショルドは、アメリカの国連大使に、自分が「全ての切り札を手にしているときに、ルムンバのみが愚かにも勝負に出ようとしている」と語っている⁵⁰。実際、8 月 22 日の安保理会議では、コンゴ政府の立場を支持したのは、ソ連とポーランド、そして両国の要請で演説したギニアのみであり、残りの国々はハマーショルドの立場を支持した。このため、ソ連代表は、決議の実施を現場で監督する監視団の設置を求める決議案を撤回せざるをえなかった。

結局、ハマーショルドのパターンリズムは、彼が子供とみなしたルムンバに対する理解を妨げる大きな要因となったといえる。そもそも、ハマーショルドは、ルムンバの怒りの原因について、国連軍のカタンガ進駐がルムンバのカタンガ支配に結びつかなかったためだという、見当違いの見方をしていた⁵¹。そして今や、ハマーショルドにとって、ルムンバは「プチ独裁者 (petit dictateur)」であり、「赤子のヒト

⁴⁵ 同決議は、事務総長に、「技術支援」と「軍事的援助」を「コンゴ共和国政府との協議の上で」コンゴに供与するのに必要な措置を採る権限を与えていた。S/RES/143, ODS.

⁴⁶ 14 日から 15 日にかけての計 5 通の往復書簡については、UN Document S/4417/Add.7, 15-8-1960, ODS.

⁴⁷ 「レオポルドビルでの記者会見・1960 年 8 月 17 日」バトリス・ルムンバ『息子よ未来は美しい』理論社、1961 年、105-108 頁。

⁴⁸ Incoming B453 from SecGen to Cordier, 15-8-1960, Incoming/outgoing code cables, L179, KB. また、ルムンバが、最後の書簡で、ベルギー国王の母がスウェーデン出身であることを暗喩して、「ベルギー王家に特別な親近感を持っていることで知られている国」の部隊をカタンガに送った「策謀」に言及したことについて、ハマーショルドは、「邪悪さによって悪用された愚かさ」だとして、不快感を露にした。Incoming B460 from SecGen to Cordier, 15-8-1960, ibid.

⁴⁹ チョンベとの会談の中でも、ハマーショルドは、カタンガ問題の決着について、コンゴ人自身が決めることだとしながらも、「バルカン化」による小国への分裂は新たな混乱を招くとして、コンゴの統一が望ましいとの個人的な考えを伝えている。«Compte rendu analytique entretien du 12 août 1960 entre le Secrétaire Général des Nations Unies et le gouvernement Katangais», boîte Katanga II, Archives Vandewalle, MRAC.

⁵⁰ Telegram NY434, 17-8-1960, UPA, reel4.

⁵¹ Ibid.

ラー (bébé Hitler)」であった⁵²。こうして、ハマーショルドの努力は、ルムンバを理解し、そして自らの方針についてルムンバの理解を得るよりも、むしろ、ルムンバを排除する方に向けられていくことになった。

(4) パターナリズムに基づく内政干渉

こうして、ハマーショルドを初めとする国連職員たちは、ルムンバを失権させ、彼らが「コンゴの政治的未来の礎となるべき者たち」だとみなす「穏健派」による政権奪取を後押しすることになった。それは、彼らが望ましいと考える政権への変更に乗り出すことであり、彼らのパターナリズムが昂じて内政干渉を引き起こすまでに至ったことを意味していた。

もっとも、彼らはそれを単独で行ったわけではなかった。ベルギーやアメリカも、各々の動機から、「穏健派」による政権奪取を推進した。旧宗主国ベルギーと反植民地主義を掲げるルムンバ「急進派」との対立は、脱植民地化の過程で生じたものであった。とりわけ、「コンゴ危機」が発生し、ルムンバがベルギー政府に対して国交断絶を通告して以来、ベルギーはルムンバの失権を画策してきた。同様に、ベルギーと敵対路線を採る「急進派」と協調路線を採る「穏健派」の対立も、脱植民地化の過程に根ざしていた。「穏健派」は、ルムンバが訪米した7月末頃から政府転覆の動きを見せ始め、8月下旬には具体的な計画を練り上げた。ベルギー人たちは、計画段階からこの政府転覆計画に関わっていた。

他方、アメリカは、ソ連の関与を排除する点から、「穏健派」による転覆活動を支援した。また、アメリカにとって、ルムンバは、単にソ連に接近していることよりも、むしろ国連軍の撤退に言及している点において、邪魔な存在となっていた。サハラ以南地域への軍事的関与に消極的だったアイゼンハワー政権は、自国の関与を避け、且つソ連の関与を防止する上で、国連コンゴ活動が必要だったからである。8月18日の国家安全保障会議で、ディロン國務次官

が「国連の除去は災難」であり、「我々はこれを阻止するためにあらゆることをすべきだ」と述べると、ドワイト・アイゼンハワー大統領 (Dwight Eisenhower) も、「国連が追い出されるのは単純に考えがたい」とこれに同意した⁵³。そして、この国家安全保障会議をきっかけとして、暗殺工作を含む、CIAの対ルムンバ秘密工作が始動することになった⁵⁴。

そして、ハマーショルドも、ルムンバとの決裂後、ルムンバの失脚と「穏健派」による政権奪取を明確に口にするようになった。米国国連大使に対し、ハマーショルドは、ルムンバが「打破 (broken)」されねばならないと述べ、国連とルムンバとの間で起こる「新たな危機」に国連が勝利し、「その危機が、カサヴブやイレオが効果的な支配を請け負うことができるのに十分なほど、コンゴにおけるルムンバの政治的な力を削ぐ」ことを期待すると伝えている。また、ハマーショルドの執務補佐官のコーディアも、恩師への私信の中で、「様々な方法で、事務総長は穏健派を奨励しており、彼らは他の強力な政治的な勢力からも奨励を受けている」ことを記している。さらに、フランスの国連大使も、「H氏 (ハマーショルド) は、穏健派の成功とルムンバの除去 (elimination) を望んでいる」との印象を本国に伝えている⁵⁵。

加えて、ハマーショルドは、カタンガのチョンベ大統領と「穏健派」との間には「カタンガ問題はせず」、ルムンバとの間にはのみ問題が存在するため、ルムンバが「どいて (out of way)」, 上記の「危機」が過ぎれば、カタンガ問題は解決するという短絡的な見方に陥っていた⁵⁶。

これに対し、国連の支援に見切りを付けたルムンバは、独力でのカタンガ問題の解決を試み、8月下旬にカサイ州南部とカタンガへの侵攻を開始した。ベルギー「軍」の撤退は決まっても、ベルギー人将

⁵² Memorandum of Discussion, NSC, 18-8-1960, *FRUS*, 1958-60, vol. 14, 421-424.

⁵³ US Senate, "Alleged Assassination Plots Involving Foreign Leaders - An Interim Report of the Select Committee to Study Governmental Operations," Report No. 94-465, 20-11-1975, http://www.aacrlibrary.org/publib/contents/church/contents_church_reports.htm (accessed, 10-9-2010) (以下 Church Report と略記)。

⁵⁴ 括弧内は筆者による。Telegram NY517, 26-8-1960, *FRUS*, 1958-60, vol. 14, 444-46; Cordier letter to Schwalm, 18-8-1960, cited in Collins, 259; Note de Ambassade de France en Belgique, 18-8-1960, cab3765, A36II, Archives africaines, AMAE.

⁵⁵ Telegram NY517, op. cit.

⁵² Note sans titre de Ambassade de France en Belgique, 18-8-1960, cab3765, A36II: Archives du Cabinet du Ministre P. Wigny 1960-1961, Archives africaines, AMAE.

校や政治顧問たちが「技術者」となって残留し、カタンガ体制を支え続けていたからである。更には、8月上旬にダイヤモンドの産出地域であるカサイ州南部地域が、ベルギー人の積極的な支援を受け、「鉱山共和国」として分離独立を宣言していた。両政権がベルギーの後盾により体制を確立するのを防ぐには、コンゴ国軍で両政権を粉碎するしかないように思われた。

この侵攻に当り、ルムンバはソ連から提供されたトラックと輸送機で兵を輸送したが、これがハマースホルドの不安を掻き立てることになった。ソ連が二国間援助によって国連を迂回する形で援助を行えば、ソ連のように「(コンゴの)中に入りたがっている者」に対して、扉が開いてしまうと考えられたからである。「朝鮮状況」の発生を懸念するハマースホルドは、ソ連が「コンゴ政府の要請だと主張するのに十分な社会的地位を持つ」傀儡を得ることを危惧していた⁵⁷。

このような状況の中、ルムンバ政権転覆活動が動き始めた。8月下旬に「穏健派」が立てた計画では、上院が政府不信任決議を議決するとともに、「穏健派」閣僚が辞任して、カサヴブ大統領が残りの閣僚を解任する手筈になっていた。ところが、カサヴブの腰は重く、反対派からルムンバ暗殺計画を持ちかけられた際、暴力的な手段をとりたくないこと、またルムンバに代わりうる才覚を持った人物がいなかったことから、その計画に反対した。カサヴブは、「政治的な変化」を望む一方で、自らがそれを引き起こすことには消極的であった⁵⁸。

リセ・ナミカス(Lise Namikas)も指摘するように、カサヴブによるルムンバ解任が、カサヴブ自身のイニシアティブによるものだったのか否かという点は、「コンゴ危機」研究における一つの論点となってきたが⁵⁹、上記を見る限り、イニシアティブと呼ぶにはカサヴブはあまりに消極的であったといえる。そうであればこそ、ルムンバの更迭を望む者たちは、

カサヴブを動かすべく説得を重ねる必要があった。ベルギーのブラザヴィル総領事は、カサヴブと親交の深かった隣国コンゴ・ブラザヴィルのフルベール・ユールー大統領(Fulbert Youlou)を通じて、更迭の法的論拠を記した覚書をカサヴブに渡し、ユールーのフランス人アドバイザーも、カサヴブを夕食に招いて説得した。また、CIAのレオポルドヴィル支部長も、回顧録の中で、ルムンバ解任の指南書をカサヴブのために作成したことを認めている⁶⁰。そして、バンチの後任が到着するまでの中継ぎとしてコンゴを訪れたコーディアも、カサヴブの説得に奔走した。コーディアは、ルムンバの更迭について、四度に渡ってカサヴブと会談し、「国家の非常時における、国連軍の役割の範囲と限界について」、詳細に説明した。カサヴブのベルギー人私設顧問が後にアメリカ大使館員に明かしたところによれば、ユールーのフランス人アドバイザーからの圧力が高まったことや、コーディアがカサヴブに国連による保護を保証したことで、最終的にカサヴブはルムンバ更迭に踏み切ったのだという⁶¹。

ベルギー人、フランス人、アメリカ人、国連職員、そして「穏健派」指導者に促され、9月5日、遂にカサヴブ大統領は、ルムンバ首相の解任を発表した。カサヴブは、ルムンバが恣意的な統治を行っていることや、国を内戦に巻き込んだことを理由に、ルムンバを首相から解任し、後任の首相に「穏健派」のジョゼフ・イレオ上院議長(Joseph Ileo)を指名した。これに反発したルムンバは、議会の信任を得る首相を解任する権限はカサヴブにはないと主張し、カサヴブが権限外の権力を行使したため、自分もカサヴブを元首の座から解任すると発表した。これにより、コンゴ政府は瓦解し、ルムンバを首班とする政権と、イレオを首班とする政権の両者が合法政府を主張する状況に陥ることとなった。

⁵⁷ Note ("Top Secret"), 4-9-1960, D.H.'s personal notes on Congo operation with "odds", D.H.'s strictly personal correspondence on Congo with his personal notes on Congo operation, Congo Crisis, Dag Hammarskjöld Saml., KB.

⁵⁸ Church Report, 15; Télégramme 149 de Brazzaville, 17-8-1960, 182971-a, Archives diplomatiques, AMAE.

⁵⁹ Namikas, 183-84.

⁶⁰ *Enquête Parlementaire*, 110, 115, 118-119; Jef Van Bilsen, *Congo 1945-1965: La fin d'une colonie* (Bruxelles: CRISP, 1994), 251-52; Lawrence Devlin, *Chief of Station, Congo: A Memoir of 1960-67* (New York: Public Affairs, 2007), 67.

⁶¹ Cordier letters to Schwalm, 18 August 1960 and 15 September 1960, cited in Collins, 258-60; Memorandum of Conversation, Van Bilsen and Robert McKinnon, 22-9-1960, enclosed to Despatch Bru287, 23-9-1960, 770G11, UPA, reel27.

(5) 更なるクーデター

「穏健派」の政権奪取を望んだ者たちの期待に反し、政権奪取は容易には実現せず、むしろ情勢はルムンバの方に有利に展開し始めた。予想された上院での政府不信任決議は実現せず、議会はルムンバ寄りの態度を見せたからである。この状況に対処するため、外部の介入者たちによる更なる梃子入れが必要となった。

カサヴブとルムンバの対決において、ONUCは当初からカサヴブの側に肩入れしていた。コーディアが空港とラジオ放送局を封鎖したことにより、ルムンバ派の軍隊がカサヴブの地盤であるレオポルドヴィル州に到着することは阻止された。また、レオポルドヴィルの放送局が封鎖されても、カサヴブは、コンゴ河を挟んだ対岸の隣国コンゴ・ブラザヴィルの協力を得て、自分寄りの放送を流すことが可能だった。ハマーショルドがイギリス国連代表部に明かしたように、「国連の活動は、実際にはカサヴブの味方をしており、味方するように立案されていた」が、「厳密に不偏不党であるように表しうる」ものであった⁶²。また、アメリカ側に対しても、ハマーショルドは、「国連や彼自身の立場を損なうことなく、憲法を越える（extra-constitutional）措置を通じて、ルムンバを取り除こうとしている」ことを認めている⁶³。

ハマーショルドは、もしルムンバがカサヴブに勝ち、国連の撤退を求めた場合には、これを受け入れず、安保理に持ち込むつもりであった⁶⁴。ハマーショルドの考えでは、コンゴ政府がONUCの撤退を要請しても、国連憲章7章を発動して居残ることが可能なはずであった。これは平和維持活動における受入国同意原則を覆すことを意味しており、その点で興味深い⁶⁵。

しかし、このような梃入れにもかかわらず、カサヴブとルムンバの政治的な力量の差は明確であった。ルムンバが更迭劇の当日に三度もラジオ放送を行い、続く二、三日で、各国の大使と積極的に会談したのに対し、カサヴブは自らの放送を終えたと帰宅して寝てしまった。このため、国連職員たちがコンゴ軍参謀長のジョゼフ・モブツ大佐（Joseph Mobutu）との会談を設定しようとしたにもかかわらず、彼らはカサヴブに会うことができなかった。ハマーショルドの側近の一人であるハインリヒ・ウィッシュホフ（Heinrich Wieschhoff）は、このようなカサヴブの性格を嘆き、「このような人材とどうやって革命を起こすのか」とアメリカ側に漏らしているが、国連職員が自分たちの行動を「革命」と評したことは示唆的である⁶⁶。

こうして、事態はルムンバにとって有利な方向に展開し始めた。7日、下院は、カサヴブとルムンバの両者の宣言を無効とする動議を可決し、翌日、両者の和解を模索するための委員会を発足させた。また、上院は、8日、「穏健派」の目論見とは逆に、不信任決議どころか、カサヴブの決定に反対する動議を可決した。更に13日、両院の議長は、両院合同の会議を開くことを決め、同会議は、ルムンバがカサヴブとの和解を模索するための「全権」を、ルムンバに与える決議を可決した。戦況を不利と見たイレオは、新内閣の発足に必要な議会手続きを始めようとせず、カサヴブは合同会議の翌日に、両院を一ヶ月休会することを発表した⁶⁷。それでもまだ、ハマーショルドは、「ルムンバを打破せねばならないと確信しているし、それができると信じて」いた⁶⁸。

このため、次にハマーショルドらが試みたのは、モブツ大佐の取り込みであった。モブツとONUCとのつながりは、更迭劇のあった5日に、モブツがONUC副司令官ベン・ハムー・ケッタニ（Ben Hammou Kettani）の家に、自分の家族を避難させたことから窺うことができる。ダヤルが、「彼（モブツ）は助言を聞く」と報告したように、モブツは国

⁶² FO371/146643, JB1015/295, cited in James, 71.

⁶³ Telegram NY605, 7-9-1960, *FRUS*, 465-66.

⁶⁴ *Ibid.* なお、ハマーショルドは、正式な撤退要請が起きた場合に備えて、6頁に渡るルムンバへの書翰を用意していた。Telegram NY618, 8-9-1960, UPA, reel5.

⁶⁵ ハマーショルドの理屈は、国連の撤退が外国の介入を招き、平和に対する脅威になるというものであった。ルムンバが正式に撤退を要請する前に失権したため、このような事態には至らなかったが、もしこのような理由で憲章7章が発動されていたら、国連平和活動の理論研究に大きな影響が及ぼしたであろう。詳細については、拙稿、前掲論文、166-167頁を参照。

⁶⁶ Incoming B800 from Cordier to SecGen, 5-9-1960, Incoming/outgoing Code Cables, L179, KB; Telegram NY602, 7-9-1960, *FRUS*, 1958-60, vol. 14, 464.

⁶⁷ Catherine Hoskyns, *Congo since Independence: January 1960 - December 1961* (London: Oxford Univ. Press, 1965), 201-06.

⁶⁸ Telegram NY631, 10-9-1960, UPA, reel5.

連の望む措置を行った。モブツは、国防相を兼務するルムンバの指示には従わずに、政治対立に対して「中立」であることを兵に説き、カタンガの侵攻を試みていた兵士にも停戦を命じた。

このようにモブツは当初は国連の強い影響下にあったといえる。独裁時代の「ストロングマン」のイメージとは異なり、当時のモブツは、それほど強い指導者とは言えなかった。ダヤルは、ハマーショルドへの公電の中で、「善意を持つ弱い人間」という印象を伝えている。実際、モブツは二度に渡って辞意を漏らし、その度に国連職員たちから翻意を促された⁶⁹。

14日のモブツのクーデターが、外部者の入れ知恵によるものだったことを直接指し示す証拠は挙がっていないが、少なくとも彼らが事前にそれを知っていたことを窺わせるエピソードは存在している。国連事務局の内部資料によれば、モブツの放送の数時間前には、ONUC 副司令官のケッタニが、モブツから軍が 17 時に全政府権限を乗っ取ることを聞いたことをダヤルに伝えている。その後、モブツ本人が ONUC 本部に現れたため、国連の関与を疑われることを恐れたダヤルは、すぐにモブツを追い返したが、22 時に予定される記者会見までモブツに付き添っているようケッタニに依頼した。この際、ダヤルらがクーデターを止める素振りを見せなかったことは注目に値する⁷⁰。なお、この二ヵ月後、ハマーショルドの軍事アドバイザーのインダール・ジット・リクエ准将 (Indarjit Rikhye) が、ハマーショルドへの公電の中で「他の二人はともに極度に危険な人物であるため、モブツを選んだ我々の選択は正しかったと言わねばならず、我々は参謀長の地位にいる彼を支援せねばならない」と記述していることは示唆的である⁷¹。

結局、モブツは 20 時に放送を流し、「国の袋小路

から脱するため」、国家元首、ルムンバ内閣、イレオ内閣、議会の全てを 12 月 31 日まで無効にすると発表した。但し、モブツは、軍が権力を握るのではなく、大学卒業者と学生に臨時政府を作るように要請することを明らかにした。これを受け、19 日に学生たちによる「理事会 (Collège des Commissaires)」が臨時政府として発足し、「穏健派」のジュスタン・ボンボコ (Justin Bomboko) がこの組織の長に就任した。このことから、「穏健派」とモブツとのつながりは明らかであった。アメリカの勧めで、カサヴブは 29 日、この「理事会」を暫定政府として任命し、両者は提携関係を公に示すことになった。

これに対し、ルムンバは既に主なスタッフを逮捕され、本人も首相公邸で国連軍のガーナ部隊に保護される身となった。こうして、ルムンバの失脚は決定的となった。

このように、外部の干渉者たちは、国内の敵対勢力を支援して、正統な手続きを経て選ばれた首相を失権させることに成功した。しかし、「穏健派」政権の成立は容易には成功しなかった。この節で見たように、議会に確固とした支持基盤を持たない「穏健派」は、議会の承認を得ることができなかったからである。これは、政府転覆にあたって、コンゴ人たちの意思を一切考慮しなかったことが裏目に出たことを意味していた。このため、政府不在の状況は長期化することになる。

3 干渉者の望む政権の形成

これまで見てきたように、ハマーショルドは、自らがコンゴ人たちよりもよいコンゴの未来を作ることができるという確信の下、首相としてより適格だと彼が考える「穏健派」を権力の座に据えるべく、その支援を行ってきた。しかし、ハマーショルドらの期待に反し、彼らの望む「穏健派」政権は容易には実現しなかった。そうして、政府瓦解の状況が長引く中、各地で両派を含めた権力闘争が発生し、各州の状況は悪化の一途を辿ることとなった。

(1) 誤算と政策の建て直し

議会がカサヴブ大統領の指名したイレオ内閣を承認しなかったのは、ハマーショルドら外部者にとつ

⁶⁹ Incoming B1347 from Dayal to SecGen, 2-11-1960, Incoming/outgoing Code Cables, L179, KB; Incoming B1424 from Dayal to SecGen, 14-11-1960, *ibid.*; Incoming B822, 6-9-1960, *ibid.*; Incoming B913 from Dayal to SecGen, 12-9-1960, *ibid.*

⁷⁰ Incoming B962 from Dayal to SecGen, 14-9-1960, Top Secret Cables Sep60-Sep61, L179, KB; Incoming B972 from Dayal to SecGen, 14-9-1960, Incoming/outgoing Code Cables, *ibid.*

⁷¹ 括弧内と傍点は筆者による。リクエは、この電信の数日前に、レオポルドヴィルの軍キャンプの司令官であるココロや、ティスヴィル部隊の将校であるボボノと会談していた。Incoming B1424, *op. cit.*

て、大きな誤算であった。議会手続きに則った政権の移行が容易には実現しないことが明らかとなったからである。とりわけ、ハマーショルドは国連事務総長という立場上、あくまでコンゴ憲法の規定に則った政府しか承認することができず、従って、違法に作られたモブツの「理事会」をそのまま政府として認めることはできなかった。手詰まり状態に陥ったハマーショルドは、政策の建て直しを図らざるをえなかった。

「穏健派」による政権奪取が失敗したことで、ハマーショルドは、当初の方針に行き詰まりを感じていた。イギリスの国連大使は、「初めてハマーショルドが、辿るべき明確な道筋が見えないと告白した」と本省に報告している⁷²。カサヴブは「全く何もせず」、モブツは「弱い輩」で、ルムンバは「恐らく薬物依存」で、ボンボコは「帝国主義者の傀儡と疑われている」状況で、ハマーショルドには、「(コンゴの) 未来のために頼れるほど強い者が誰もいない」と感じられたからである⁷³。ハマーショルドの見解では、「全指導者は三流の現地の政治家たちで、望みうる最上のことは、国連に頼る弱い政府の確立」であったが、「そこへ行く道すら現状では実現困難」であった⁷⁴。この発言は、コンゴ人たちに対する蔑視感とともに、コンゴの未来を形成するのはコンゴ人ではなく自分であるという、彼のパターナリズムを良く表していたといえる。

他方で、政府を瓦解させた影響が早くも各地で始まっていた。中央政府の瓦解を受け、各州で権力闘争が発生したためである。現地のダヤルからは、「レオポルドヴィルを中心とした混乱と無法という伝染病が、各州に広がっており、重大な不安状況を生み出して」との報告が届いていた。ダヤルによれば、「(政府からの) 一貫した指示、あるいは中央との通常の接触さえないことが、全ての州政府を更に麻痺させており、紛糾が長引けば長引くほど、州は経済的、行政的崩壊に近づく」状況にあった。このため、ダヤルは、「個人、部族、政党の立場が鮮明化

し、苦々しさ (bitterness) が増大するにつれ、全体的な状況は改善するどころか悪化している」と警鐘を鳴らし、「中央での政治的な袋小路を解決することが急務であり、さもなければ各州の状況はますます悪化する」と訴えた⁷⁵。

こうして、ハマーショルドは政策の見直しを図ることとなった。その際、国連事務総長という立場上、ハマーショルドには、コンゴ憲法に則って、議会の承認する政府の再興を支援する必要があった。そしてそれは、議会第一党である MNC-Lumumba 党を無視しえないことを意味していた。このため、ハマーショルドは、議会の同意がなければ議員の不逮捕特権は剥奪されないとして、モブツに対し、ルムンバの身柄の引渡しを拒否する立場を示すことになった⁷⁶。

しかし、これは、ハマーショルドがルムンバの復権を受け入れたことを意味したわけではない。ハマーショルドは依然として、再興される政府の首相として、「穏健派」のイレオを推していたからである。アメリカ側に伝えたように、ハマーショルドは、イレオ政府を「磨きなおして (refurbish)」、議会の承認を取るべきだと考えていた⁷⁷。つまり、ハマーショルドの方針は、ルムンバの復権を阻みつつ、「穏健派」の主導する政権を成立させ、それをルムンバ派が第一党を占める議会に承認させるという、難しい舵取りを迫られるものであった。このことは、議会の再開には、念入りな多数派工作が必要であることを意味していた。

このことにより、更なる政策の修正が必要となった。上述のように、ハマーショルドは、当初、カタンガ政府によるベルギー人の登用に関知しない方針を採っていたが、カタンガ議員の票が議会におけるキャスティングヴォートになる可能性が生じるにつれ、カタンガの議員を中央議会の場に引っ張り出す必要がでてきたからである。そのためには、分離運動を支えているベルギー人たちを排除する必要があった。

⁷² Telegram NY956 to Foreign Office, 30-9-1960, JB2551/272, FO371/146780, The National Archive, London (以下 TNA と略記)。

⁷³ 括弧内は筆者による。Telegram Secto40, 11-11-1960, FRUS, 1958-60, vol. 14, 524-25。

⁷⁴ Telegram NY956, op. cit.

⁷⁵ 括弧内は筆者による。Incoming B1085-86 from Dayal to SecGen, 26-9-1960, ibid.; Incoming B1158 from Dayal to SecGen, 2-10-1960, ibid.

⁷⁶ Telegram Leo1078, 1-11-1960, ibid., 561-62; Telegram 1372 DoS to Leo, 12-11-1960, ibid., 584-86。

⁷⁷ Telegram NY1188, 29-10-1960, FRUS, 1958-60, vol. 14, 556-560。なお、この論点については、拙稿、前掲論文を参照。

このため、ハマーショルドは、国連がベルギー人に代わってカタンガを含めたコンゴ全土の後見人となる構想を立てた。このことは、英国国連大使に対し、ハマーショルドが「(カタンガのチョンベ大統領が)依存をベルギーから国連に変えねばならない」と述べたことから確認できる⁷⁸。また、アメリカ側に対しても、ハマーショルドは、「チョンベのベルギー人アドバイザーや支援者を除去」し、「チョンベに対する全ての支援」も、「国連を通じてなされる」必要があるとの考えを伝えている⁷⁹。このようなハマーショルドの構想を、アメリカのジェームズ・ベンフィールド国務次官補代理 (James Penfield) は、「事実上のコンゴの信託統治」と評した⁸⁰。当時には「暫定統治」という用語が使われてなかったため、「信託統治」という表現になったのだと思われるが、ベンフィールドの言葉は、国連がコンゴ人たちに代わって実質的な国家運営を行うことを指していたのだといえる。

このような構想を実現する上で、ベルギー人の排除と国連による統治を達成するために、ONUCの権限を強化する必要があった。こうして、ハマーショルドは、「善意による干渉」をより強力で広範囲に渡って行うために、ONUCの権限強化を模索することとなった。

(2) ONUCの権限強化の試みとコンゴ人の反発

前項で述べた要因以外にも、ハマーショルドらにとってONUCの権限強化が必要な理由があった。それは、国連が保護するルムンバの身柄の引渡しを「穏健派」に対して拒んで以来、「穏健派」指導者たちとONUCの現場責任者であるダヤルとの関係が悪化していたことであった。この項で見ると、「穏健派」の敵対的な態度を懸念したハマーショルドは、ONUCの権限強化によって力で押さえ込むことを考えた。しかし、このようなパターンリズムは、カタンガ政府や「穏健派」指導者たちから、更なる反発を買うことになる。

もっとも、このようなONUCの権限強化を図る上で、ハマーショルドにとって追い風となる出来事もあった。ケネディ政権の成立である。同政権は、ベルギーよりもハマーショルドの方針を優先することを、前政権よりも明確に打ち出したからである。同政権のコンゴ政策の骨子は、ONUCの任務の強化、「穏健派」が主導する政権の成立、国連によるコンゴ行政の運営の三点であり⁸¹、これらはハマーショルドの政策を支持することを意味していた。

このアメリカの新政策をめぐる米国国連大使との協議の中でも、ハマーショルドは、パターンリズムとコンゴ人軽視を窺わせる発言を行っている。三点目の国連による行政運営について、ハマーショルドは、「政治的な覆い」としてコンゴ政府が必要だが、実際には国連がほとんどの決定を行う人員を提供すると述べているからである。ハマーショルドの考えでは、「実際の状況は、コンゴ人が国連に相談し、その逆ではないような状況であるべき」だった⁸²。それは、本来あるべきコンゴ人への支援のあり方は正に逆の状況を意味しており、彼の構想において、コンゴ人たちは単なる「政治的な覆い」に過ぎなかった。

一点目のONUCの任務の強化についても、国連職員たちのパターンリズムに基づく強権性を垣間見ることができる。というのも、彼らは、コンゴ国軍を国連の制御下におくためにONUCの権限を強化することを考えていたからである。その背景には、ダヤルがモブツに対してルムンバの身柄の引渡しを拒否して以来、ダヤルと「穏健派」との関係が悪化していたことがあった。ダヤルの見方では、「コンゴ当局の敵対的行為」は、国内における「絶対的な覇権」を得るのに国連軍が邪魔なためであり、異なる意図を持つ二つの軍隊の対峙は「必ず紛争に発展する」危険性があった。よって、「我々のトラブルの根源」はコンゴ国軍であり、それに対処するための権限強化が必要であった。つまり、国連がコンゴを統治す

⁷⁸ Telegram NY1145 to Foreign Office, 22-10-1960, JB1015/390, FO371/146648, TNA.

⁷⁹ Telegram NY1021, 15-10-1960, FRUS, 1958-60, vol. 14, 530.

⁸⁰ Confidential Report No 15113/900/60 from Washington to Foreign Office, 3-11-1960, JB1011/96, FO371/146668, TNA.

⁸¹ "Suggested New United States Policy on the Congo," attached to Memo from Rusk to Kennedy, 1-2-1961, Glenn LaFantasie ed, FRUS, 1961-63, vol. 20 (DC: US Government Printing Office, 1994) (以下FRUS2と略記), 40-45. なお、この提言書の言う「中道政権 (middle-of-the-road government)」や「広い基盤の政権」とは、イレオを首班とし、「ルムンバ派」を含んでもルムンバ自身は含まない内閣のことであった。

⁸² Telegram NY2059 31-1-1961, FRUS, 1961-63, vol. 20, 35-37.

る上で、関係の悪くなった「穏健派」を力で押さへ込むため、コンゴ国軍を国連の制御下におくべきだというのがダヤルの提言の主な趣旨であったといえる。ダヤルの提言を受け、ハマーショルドも、軍を政治から切り離れたうえで、国連の制御下に置くことが必要だと考えた。基本的には、ハマーショルドは、コンゴ国軍の訓練によってこれを実施するつもりだったが、「制御されない部隊」に対しては、最終的には「力による立場の押し付け」も完全には排除していなかった⁸³。

ハマーショルドは、2月初旬の安保理会議でONUCの権限強化の必要性を説明し、アメリカも各国に対し、こうした方針を打診した。しかし、当時、アジアやアフリカの国々の中でも反植民地主義を強く掲げる諸国は、ルムンバを支持しており、モブツの兵の武装解除、ルムンバを含む政治犯の釈放、議会の召集、外国人顧問の追放などを国連に求めていた。ハマーショルドは、この時点でのルムンバの釈放には消極的であったが、安保理非常任理事国のセイロンや、国連軍において中核的な兵力を担いつつあったインドは、ONUCの権限強化が政治犯の釈放を伴わねばならないとの立場を採っていた⁸⁴。

ところが、カタンガ政府によるルムンバの死の公表によって、ハマーショルドらはこのルムンバ釈放問題から解放されることになった。ルムンバは、11月末に国連に保護されていた首相官邸を抜け出て、支持基盤であるスタンレーヴィルに移動する途中でモブツの兵に捉えられ、1月にカタンガに移送された後、ベルギー人と現地当局によって殺害されていた。その事実は伏せられていたが、2月初旬にはルムンバの死の噂が流れ始め、2月10日、カタンガ政府はルムンバの「脱走」を発表し、その三日後、現地住民によって殺害されたとの声明を出したのである。これに憤激したアラブ連合、ギニア、ガーナ、モロッコ、マリのほか、東側諸国は次々と、12月に東部州のスタンレーヴィルに「遷都」した「急進派」の政権を「正統政府」として承認したため、コンゴ

において内戦の危険性が高まることとなった。

この事態を受け、安保理では、セイロン、リベリア、アラブ連合が、武力行使を含むあらゆる手段による内戦の防止、国連管轄外の外国人の軍人、傭兵、政治顧問の退去、議会の再召集、コンゴ軍の再編成と訓練などを骨子とした共同決議案を提出し、2月21日、これが安保理決議161として成立した。しかし、武力行使は内戦の防止という目的に限られ、コンゴ軍を非武装化する権限は与えられず、ハマーショルドの期待したほどの権限強化はなされなかった⁸⁵。

それでも、上記のような国連職員たちのパターンリズムに基づくONUCの権限強化に対し、コンゴ人たちからは反発が起きた。決議成立の二日後、イレオはラジオ演説において、同決議がコンゴを信託統治化し、このために国軍を非武装化する目的を秘めたものだと批判し、カサヴブも27日、「国民の総力を動員」して、陸軍の非武装化と「国連の信託統治」に反対する構えを見せた。また、カタンガ政府も、同決議を国連による宣戦布告だと非難して「総動員令」を発令し、欧州人顧問を退去させないよう、白人を含む全てのカタンガ市民に「カタンガ国籍」を付与することを決定した⁸⁶。更に、「穏健派」のレオポルドヴィル政権と、カタンガ政府、カサイ州の「鉾山共和国」の三者は、28日、「共産主義の専制」の脅威と「咎めるべき国連の消極性」に対抗するための軍事協定を結んだ⁸⁷。そして、3月3日、ONUCとモブツの国軍との間に小競り合いが発生し、マタディ港からの撤退を余儀なくされた国連軍は補給路を「穏健派」政権に押さえられることとなった。

このため、国連職員たちにとって、「穏健派」との関係改善が急務となり、「穏健派」指導者たちの「誤解」を解く必要が出てきた。もっとも、本稿でみてきたように、ハマーショルドが、国連による暫定統治（コンゴ人たちの言う「信託統治」）の計画を持っていたこと自体は、誤解ではなかった。但し、それ

⁸³ Ibid. なお、国務省から駐印大使への公電でも、新方針に関して、「我々は、我々と同じ線と考えている事務総長と緊密に協議してきた」ことが記されている。Telegram New Delhi, 2-2-1961, *ibid.*, 47.

⁸⁴ Hoskyns, 318-335; Telegram NY2096 and 2111, 3-2-1961, UPA, reel 8.

⁸⁵ このため、ハマーショルドは、「権能 (competence) の範囲は広がったが、強制行動を行う力は広がっていない」と感じていた。Outgoing 1537-38 from SecGen to Dayal, 5-3-1961, S0217-0005-01, UNA.

⁸⁶ Hoskyns, 338-341.

⁸⁷ Madeleine Kalb, *The Congo Cables: The Cold War in Africa from Eisenhower to Kennedy* (NY: Macmillan Publishing, Co., Inc., 1982), 237; Hoskyns, 315, 338-343; Benoit Verhaegen ed., *Congo 1961: Les Dossiers du C.R.I.S.P. Bruxelles: CRISP* (以下 Congo1961), 25.

が安保理決議 161 に盛り込まれたと考えるのは彼らの誤解であった。このため、ハマーショルドは、後者が誤解であることを説明することにより、あたかも暫定統治構想自体がコンゴ人たちの誤解であるかのような主張を行う戦略に出たのである。

従って、ハマーショルドは、カサヴブに書簡を送り、決議が明記した「内戦の防止」が「予防的、和平的措置であって強制ではなく」、国連には「信託統治」を樹立する意図はないとの説得を試みた⁸⁸。また、ハマーショルドは、ダヤルの代行として、スーダン人のメッキ・アバス (Mekki Abbas) を派遣し、表敬訪問の機会を利用して、「国連には、ある種の信託統治支配をコンゴで行う望みは微塵もなく」、「非武装化によって軍を骨抜きにすることは論外」だと「穏健派」指導者に伝えるよう指示した⁸⁹。更に、決議 161 の適用についてコンゴ側と協議する目的で、ガーナ人のロバート・ガーディナ (Robert Gardiner) とナイジェリア人のフランシス・ンウォケディ (Francis Nwokedi) が特使として派遣されることになった。

彼らの説得が功を奏し、4 月中旬、国連とカサヴブ大統領との間に協定が成立し、「穏健派」は決議 161 を受け入れ、外国人要員の退去や軍の再編成、技術者の訓練などについて、国連から支援を受けることとなった⁹⁰。

こうして、「穏健派」との関係が改善されたことを受け、ハマーショルドは、いよいよ彼が望ましいと考える「穏健派」の主導する政権の樹立に乗り出すこととなった。

(3) アドゥラ政権の樹立

これまでみてきたように、ハマーショルドは、国連がコンゴを統治することが正しいことだと信じ、そのために、自らと対立したルムンバの失権を後押しし、議会に支持基盤を持たない「穏健派」の主導する政権を作るべく力を注いできた。この「善意」に基づく干渉 (パターナリズム) は、アメリカの積極的な協力を得て、遂に実を結ぶことになる。

ところで、国連平和活動研究における伝統的な解釈では、ONUC は第三者的な立場から「急進派」と「穏健派」の和解に尽力し、その調停努力によってコンゴ政府は再興されたのだと捉えられてきた⁹¹。しかし、国際関係史の分野で明らかにされてきたように、その調停努力は、不偏不党の立場で行われたものではなかった⁹²。ハマーショルドは、明らかに「穏健派」が主導権を握る政権の成立を望んでいたからである。

ハマーショルドが、アメリカの積極的な支援の下、コンゴ政府再興へと乗り出したのは、「急進派」政権がアフリカ諸国や東側諸国から承認と支援を受ける状況を放置することができなかったからである。このため、ハマーショルドには、「急進派」と「穏健派」との「和解」を達成して「急進派」政権を解消する必要があった。もっとも、この場合の「和解」とは、第三者的な調停活動というよりは、「穏健派」が主導し、「急進派」が名目的に参加する政府を、議会の多数派に承認させることを意味していた。

この目的のため、国連職員たちは「穏健派」と「急進派」の両派に対話を促し、協議の末、4 月中旬に両者間で停戦が成立した。また、同月下旬には「穏健派」による「急進派」への経済封鎖も解除された。これを受け、国連職員たちは、政府再興に向けた話し合いをコンゴ人たちに促し、4 月下旬から 5 月中旬にかけて開催されたコキヤヴィル会議で、議会の再召集が決定された。

議会再召集の決定を受け、ハマーショルドらは、「急進派」の議会参加に尽力した。「急進派」のスタンレーヴィル政権を解消させるには、彼らを中央政府再興の動きに関与させる必要があったためである。つまり、国務省もアメリカ国連代表部に指示したように、「ギゼンガの支配する分離した東部政権」を解消するには、ギゼンガらの政府参加が必要だと考えられたのである。しかし、その一方で、「急進派」が再びソ連を引き込むことのないよう、政府内で彼ら

⁹¹ 例えば、香西茂、前掲書、107-108 頁。

⁹² Stephen Weissman, *American Foreign Policy in the Congo 1960-1964* (Cornell Univ. Press, 1974); Kalb, chp. 10; 三須拓也「非介入の名のもとでの介入—ケネディ政権とコンゴ国連軍」緒方貞子・半澤朝彦編『グローバル・ガヴァナンスの歴史変容—国連と国際政治史』ミネルヴァ書房、2007 年。

⁸⁸ UN Document S/4752 Annex IV, PPSG, 371-76.

⁸⁹ Outgoing 1535-36 and 1537-38 from SecGen to Dayal, 5-3-1960, S0217-0005-01, UNA.

⁹⁰ UN Document S/4807 Annex I, ODS.

が「不相応な影響力」を持つことは避けねばならなかった。よって、「ルムンバ・ギゼンガグループが、国の基本政策に対して支配的な影響力を行使することなく」、いわばお飾りのような形で参加するような、「穏健的な性格の政府の創設に向けて」、ハマーショルドが「影響力を発揮」する必要があった⁹³。

これに対し、ハマーショルドも、「コンゴにおける全てのステップは、リスクではあるが、穏健な政治結果を得られるように、国連が手を打っている（playing its cards）」ことをアメリカ側に伝えている⁹⁴。既に4月の段階で、ハマーショルドは、「穏健派」指導者のシリル・アドゥラ（Cyrille Adoula）を首相にして、イレオとギゼンガを副首相にするという動きが進行しているとの報告を現地から受けていた。また、アメリカも、「急進派」の支持も受けうる候補者として、アドゥラに目を向け始めていた⁹⁵。

ところが、いざ議会が開催されると、「急進派」の方がわずかに優勢であることが明らかとなった。上院議長職を除く13の役職を僅差で「急進派」の候補が獲ったからである。ここで、再びCIAが暗躍することとなった。リチャード・マホニー（Richard Mahoney）が国務省官僚に対して行ったインタビューによれば、CIA工作員たちが下水トンネルを通じて、主要な議員に対して金を配ったという。また、国連職員もアドゥラ政権成立に奔走した。アバスの帰任後ONUC全体の調整役となったリネルが、カサヴブに対し、「アドゥラを首相にするために、彼の持てるあらゆることをなす」ように促した。加えて、リネルに代わりONUC民政部門の長に就いたマームード・ヒアリ（Mahmoud Khiari）は、アメリカの駐コンゴ大使に、「急進派」と提携していたカタンガルバ族指導者が翻意して「穏健派」の方に投じる見通しを伝えており、何らかの方法で翻意を促したのではないかと見られる⁹⁶。

結局、8月1日、カサヴブは、アドゥラを政府首

班に指名し、翌日、議会がアドゥラ内閣を承認した。ボンボコは外相に留任し、イレオは情報相に就き、アドゥラが国防相を兼任した。このため、内相を除く「枢要な役職」は「穏健派」が握ることになった。ギゼンガには、「基本的には名誉職」である、第一副首相のポストが充てられた。ディーン・ラスク国務長官（Dean Rusk）は、「この成功的な結果」にリネルが大きく貢献したことをケネディに報告した。そして、国務省は、アメリカ国連代表部に対し、「良い仕事に対する我々の満足」をハマーショルドに伝えるとともに、リネルの役割が公にならないよう指示した⁹⁷。

こうして、ハマーショルドの思惑通り、「穏健派」の主導する政権が成立し、「善意」に基づく干渉は、その第一の目標を達成することになった。その後、ONUCは第二の目標であるベルギー人顧問の追放とカタンガの再併合に取り組むことになるが、その取り組みの最中にハマーショルドは命を落とすことになる。しかし、ハマーショルドの死後もその取り組みは継続し、二度に渡る国連軍とカタンガ軍との戦闘の後、63年1月にチョンベ大統領が分離活動の終結を宣言することで、カタンガの分離問題は最終的に幕が引かれることとなった。

これにより、ONUCの本来の目的であったコンゴの国家建設を行う環境が整ったように思われたが、皮肉にも、ハマーショルドらを取り持った、「急進派」と「穏健派」の「和解」は持続しなかった。上述のように、ハマーショルドにとっての「和解」とは、対立の解消を図ることではなく、「急進派」政権の解消と「穏健派」が主導権を握る統一政権を、議会における多数派工作によって実現することであった。ゆえに、「和解」の過程で、ルムンバ政権崩壊時に発生した両派の間の亀裂は、なんら修復されなかったのである。このため、カタンガの分離活動の終結後、両派の対立は再燃し、63年から64年初頭にかけて、「急進派」による反乱が発生した。この反乱軍は、一時はコンゴの国土の三分の一を勢力下に治めるほどの勢いを見せた。この事態に直面し、ウ・タント

⁹³ Telegram 2480 DoS to NY, 20-6-1961, FRUS, 1960-63, vol. 20, 148; Telegram 2248 DoS to Leo, 5-6-1961, *ibid.*, 143.

⁹⁴ Telegram NY3392, 22-6-1961, *ibid.*, 150.

⁹⁵ Telegram NY2968, 22-4-1961, FRUS, 1961-63, vol. 20, 127; Telegram 2111 DoS to Leo, 20-4-1961, *ibid.*, 130n; Telegram Leo2269, 28-4-1961, *ibid.*, 130.

⁹⁶ Telegram Leo254, 1-8-1961, UPA, reel13; なお、ステファン・ワイスマンは、ヒアリに近い欧州人から聞いた情報として、ヒアリが同僚のスイス人とともに、ロヴァニウム大学構内で議員たちへ賄賂を渡したという話を紹介している。Weissman, 151.

⁹⁷ Telegram Leo281, 3-8-1961, UPA, reel13; Memorandum from Rusk to Kennedy, 3-8-1961, FRUS, 1961-63, vol. 20, 184-85; Telegram233 DoS to NY, 3-8-1961, UPA, reel13; Kalb, 275-76.

新国連事務総長 (U Thant) は、ONUC の撤収を急ぐことしかできなかった。ONUC の撤退後、コンゴ政府はベルギーとアメリカに支援を求め、両国の軍事的支援の下、反乱は最終的に鎮圧されることとなった。

結び

以上、本稿で見てきたように、国連コンゴ活動 (ONUC) は、国連職員のパターナリズムに満ちた活動だったといえる。国連職員たちは、「独立」直後に発生した「騒乱」の主要因をコンゴ人たちの「準備不足」にあると判断し、コンゴ人たちに代わって、国連が提供する「影の事務次官」が実質的に国を統治する計画が立てられた。それは、コンゴ人たちが国連の提供する「コンサルタント」に助言を受けて国を運営するのではなく、その逆の状況であり、コンゴ人たちは単に「政治的な覆い」として、すなわちお飾りの存在として、ただそこにいれば良いと考えられた。このような状況の中で、コンゴ人たちの意思が重視されることはなかったといえる。

もちろん、支援を与えること自体が問題だったわけではない。問題は、現地の人々に対する蔑視と軽視にあった。本稿は、未熟なコンゴ人たちよりも自分たちの方がより良いコンゴの未来を形成できるという確信の中で、現地勢力の意向が軽視され、その結果として、国内状況の悪化を招いたことを明らかにした。

ハマーショルドとルムンバの決裂にも、前者のパターナリズムが大きく関係していた。もちろん、ルムンバの性格や恫喝的な外交手法に全く問題がなかったわけではない。しかし、ハマーショルドはあくまでの外部の支援者であり、平和維持活動の活動方針に関して受入国首相を説得し、理解を得る責任は主にハマーショルドの側にあったといえる。それにも関わらず、そうした説得の必要性をハマーショルドが感じなかったのは、彼がルムンバを「子供」だとみなしたことと無関係ではないだろう。

そして、国連職員たちのパターナリズムは、正統な手続きによって選ばれた首相の更迭と、彼らが望ましいと考える政府の構築という内政干渉をも引き起こすに至った。それは、誰が国を治めるべきかを

外部者である彼らが判断するという意味において、彼らのパターナリズムの表れだといえた。

しかし、結局、現地の人々の意思を軽視した彼らの政策は、その報いを受けることになる。カサヴブの指名した「穏健派」内閣は、議会の承認を得ることができなかったからである。ハマーショルドらは、ルムンバさえ除去すればうまくいくと考えたが、実際にはそうではなかった。議会においてむしろルムンバ支持の方が大きかったことは、ハマーショルドにとっては誤算であり、この点で、ハマーショルドは、ルムンバとその支持者たちの力を過小評価していたといえる。結果として、政府瓦解の状況は長期化し、その間、各地で権力闘争が発生して、国内状況は悪化していくこととなった。この間に失われた命を考えれば、政府不在の約一年間を単なるモラトリアムと片付けることはできない。これが、ハマーショルドら外部者の政策の招いた結果だからである。

更には、彼らが促した、「穏健派」と「急進派」との決裂は、両派の間に修復不可能なほどの亀裂を生み出した。そして、それはハマーショルドらが達成した「和解」によって何ら修復されることはなかった。その意味で、ハマーショルドらが後押しした、「穏健派」の「急進派」との決裂は、63 年以降に発生した「急進派」の反乱の遠因になったとも考えられる。

結局のところ、国連コンゴ活動がコンゴにもたらしたものは、植民地時代からのパターナリズムの押し付けの、形を変えた継続ではなかったのだろうか。もちろん、植民地支配を目的とした宗主国による統治と、ハマーショルドの構想とはその目的が大きく異なっていた⁹⁸。しかし、現地の人々を未熟な「子供」とみなし、彼らに訓練を施す間、代わりに国を統治するという発想と、その発想の源となっているパターナリズムには、共通点を見出すことができる。ルムンバが国連による管理に対して主権の侵害だとして反発したように、あるいは「穏健派」やカタンガ政府が安保理決議 161 を「信託統治化」の試みだ

⁹⁸ 同様に、ハマーショルドの構想は、一般的に「独立」付与後の政治的、経済的支配を目的とした「新植民地主義」とも異なる。よって、新植民地主義という観点からハマーショルドの政策構想を捉えることはできない。新植民地主義については、次の文献を参照。クワメ・エンクムラ (家正治・松井芳郎共訳)『新植民地主義』理論社、1971 年。

と批判したように、ハマーショルドの暫定統治構想は、現地の人々から見れば、パターナリズムの押し付けの担い手が、宗主国から国連に移行したに過ぎない側面があったことも見過ごすことはできない。

そして、本事例は、主権を肩代わりする形での統治や、現地の政治状況への介入度合い、現地勢力の軽視、外部に依存するような政権の形成、そしてそれらの根底に存在するパターナリズムについては、「新しい信託統治」と呼ばれる、冷戦後の国連による国家建設活動とも共通点を持っている。つまり、ハマーショルドの暫定統治構想と最近の「新しい信託統治」には、未熟な現地人の訓練と国家運営の肩代わりという「善意による干渉」と、その際に行われる意思の押し付けという点で、通底した共通点を見出すことができる。これらの事象が持つ弊害と、これらの事象を引き起こす原動力は、本稿が正にパターナリズムという概念を使って捉えようとしたものである。

国連コンゴ活動において国連側が被った人的被害が大きかったこと、そして同活動があらゆる方面から様々な批判を浴びたことなどから、この活動の後、国連による国家建設活動は久しく行われなかった。しかし、冷戦の終結後、国連による国家建設活動や暫定統治は、復活を遂げることになった。その際に、その活動に内包されていたパターナリズムも同様に再生を果たしたといえるのではないだろうか。そして、パターナリズムに基づく現地勢力の軽視と意思の押し付けは、歴史的に繰り返され、現在もまだ繰り返されているのではないだろうか。